九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『天主実義』の研究(四)：第四篇現代語訳

柴田, 篤
九州大学文学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/2328440

出版情報：哲學年報. 57, pp.57-87, 1998-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

『天主実義』の研究（四）

――第四篇現代語訳――

柴田　篤

はじめに

本稿は前稿に引き続き、イエズス会士マテオ・リッチ（中国名は利瑪竇、一五五二～一六一〇）の『天主実義』を現代語訳したもので、今回は上巻の最後である第四篇を取り上げる。この篇は、第三篇「人間の魂は不滅であり、鳥獣とは全く異なる」（人魂不滅大異禽獣）を承けて、「鬼神と人間の魂とは異なるということを弁析し、この世の万物は一体とは言えないということを解明する」（弁釈鬼神及人魂異論而解天下万物不可謂之一体）ものである。リッチが中国古来の死生観、鬼神観をどのように見ていたかということが窺えると同時に、この問題をめぐって中国の士人との間でどのような対話を展開したかが注目される。なお、中国人の死生観、来世観等に関するリッチの見解は、彼の「報告書」[1]第一の書、第九章・第十章に詳しく見える。

【注　釈】

（1）『中国キリスト教布教史・一』（『大航海時代叢書』第Ⅱ期第8巻、岩波書店、一九八二）。

【凡　例】

一　底本は、台湾学生書局「中国史学叢書」所収明版影印本『天学初函』による。

二　便宜上、中士と西士の各発言の冒頭に、順に番号を付した。中士が奇数、西士が偶数となる。

三　訳語については、以下の点に注意した。

(1)「天主」は、現在、日本のカトリック教会においては「神」と訳すが、原語のまま用いた。

(2)「中士」は中国の士大夫を、「西士」は西洋の学者即ち修道士を指すが、煩瑣になるので原語のまま用いた。

(3) 儒学、殊に朱子学の概念・用語については、そのまま用いたが、必要に応じて説明を施した。

(4) その他の表現については、できるだけ平易な現代語表記を心掛けた。

四　訳文中、〔　〕は原文にない語を補ったところを、（　）は説明を施したところを、それぞれ示す。

五　中国語として熟さない用語については、原文を注記した。その外、必要に応じて注釈を施した。

六　現代語訳に当っては、拙稿「『天主実義』の研究（一）」序説所掲の訳注書等を参考にしたが、特別な場合を除き、一一注記はしなかった。

現代語訳『天主実義』上巻（承前）

第四篇「鬼神と人間の魂とは異なるということを分析し、この世の万物は一体とは言えないということを解明する」

1　中士が言った、「昨日、私は退席して〔拝聴しました〕み教えを復習いたしましたところ、まぎれもなくすべてに真実なる道理[1]が備わっていることが明白になりました。〔それなのに〕わが国の世間知らずの学者どもが、鬼神の実在

を攻撃することを正しい道だとしているのは、一体どうしたことでしょうか」と。

2　西士が言った、「私はお国の古代の経書を隅々まで読んでおりますが、鬼神を祭ることを天子や諸侯の重大事としていないものはありません。ですから、自分の上にいるかのように、自分の左右にいるかのように、鬼神を敬っているのです。[2] どうして実在もしないのにことさら事実をねじまげて嘘を言うことがありましょうか。〔『尚書』の〕盤庚中篇には、『〔私は〕政治に失敗して久しくここに留まっている。先王はそこで〔私に〕重く罪禍を下して、「どうして我が民を虐げるのか」と言われる』[3]とあります。また、『ここで私に政治の乱れがあって、同じ官位の者が貝・玉を〔むさぼり〕集めるだけであれば、汝らの祖や父は、我が先王に告げて、「大いなる刑罰を我が子孫〔の盤庚〕に加えてください」と言い、先王を導いて大いに不吉なことを下させるだろう』[4]とあります。〔同じく『尚書』の〕西伯戡黎篇には、祖伊が紂王を諫めて『天子よ、天は我が殷〔に与えたところ〕の命を断たれました。賢人や〔占いの〕大きな亀も、吉祥を知るものは誰もいません。先王が我々後世の者を助けないのではありません。王が淫りに〔民を〕虐げることによって、御自身で〔殷の〕命を絶っているのです』[5]と言っています。盤庚は殷の〔始祖である〕湯王の九世の子孫で、四百年も隔たっているのに、しかも湯王を祭り、懼れ、湯王が罰や災いを降すということで自己を励まし人民を導いています。ですから、湯王が消滅することなく実在していると間違いなく考えているのです。祖伊は盤庚よりのちの者であるのに、殷の先王は既に崩御しておられるが、その子孫を助けることがおできになる、と言っているのですから、死者の霊魂を永在不滅と考えているのです。〔同じく『尚書』の〕金縢篇で、周公は『私は仁をもって我が父に従っております。〔また〕多才多芸で、鬼神によくお仕えしております』[6]と言っています。また、『私が〔管叔たちの流言を〕避けなければ、私は我が先王に申し開きができなくなるであろう』[7]と言っています。〔同じく『尚書』の〕召詔篇には『天は、遥か昔に偉大な国である殷の命を終わらせています。この殷には優れた王者が大勢〔既に〕天におられます。その後の王や民は〔天の命に従っています〕』[8]とあります。『毛詩』〔の大雅文王篇〕には『文王〔の

霊〕は天の上に在して、ああ天に昭らかに顕れている。〔…〕文王〔の霊〕は〔天上と地上を〕昇り降りして、天帝の左右に在す[9]』とあります。周公や召公は〔一体〕どのような人物でしょうか。湯王や文王が崩御してしまったのちに、しかも天に在って昇り降りして国や家を護り助けると述べているのですから、死後も人間の魂は滅び亡くなることがないと考えているのです。お国では、〔周公と召公の〕二公を聖人と見なしていますから、その言葉を偽りとすることができましょうか。異端〔の学〕が流行し、〔世間の人々を〕偽り欺き惑わせていますので、〔これを〕責め正すことは困難です。後世の正しい儒者はどうしたらよいでしょうか。道理を以てそれらの邪説を退け、鬼神の本性を明らかに論じてこそよいのです」と。

3　中士が言った、「現在、鬼神について議論する者はそれぞれに見解があります。ある者は、この世の中には鬼神のような異類は存在しない、と言います。〔また〕ある者は、信じれば存在するし信じなければ存在しない、と言います。〔さらに〕ある者は、存在すると説けば正しくないし、存在しないと説いても正しくない、存在するものでもあり存在しないものでもあると説けばよろしい、と言います」と。

4　西士が言った、「この三つの見解はすべて鬼神を攻撃して、その誤りに気付いていません。仏教や老荘の徒を排斥して、〔自ら〕古来の聖人の教えに背いているということを自覚していません。そもそも鬼神には、山川や宗廟や天地といった異なる名称や職分がありますから、等しくないことは明らかです。〔宋学者が説く〕『二気の良能』『造化の跡』『気の屈伸[10]』というのは、多くの経書が指している鬼神ではありません。自分の心で信じるか否かは、物が存在するかどうかを決めるものではありません。夢について説くのであればよいかも知れませんが、天地のように尊大なものを論じるのであれば、このように曖昧でおぼろげな言い方ができましょうか。たとえば、西域の獅子について、知っている者はそれが実在することを信じますが、愚かな人は信じないことがあります。しかし、獅子は本来存在するもので、信じない者が獅子の類を滅ぼすことができましょうか。まして鬼神の類を滅ぼすことができましょうか。およ

そ事物は、有るものは有り、無いものは無いのです。おそらく小人は鬼神が実在するかどうかを疑い、そこで学者に質問して疑いを解こうとしたのでしょう。〔これに対して〕もし、存在するものでもあり存在しないものでもあると答えれば、その疑いをさらに増すことにならないでしょうか。

これらの発言のねらいは他でもありません。存在するものは人が見ることができるものであり、人が見ることができないものは存在しない、と説いているだけです。しかし、これらの言葉は学者の議論ではなく、田舎者の戯言にすぎません。色や形のない物を肉眼で見ようとするのは、たとえば耳で魚肉の味を味わおうとするようなもので、不可能なことです。一体誰が肉眼で〔仁義礼智信の〕五常を見ることができましょう。誰が生きている者の魂を見ることができましょう。誰が風を見ることができましょう。目で以て物を見るのは、道理で以て推し量るのに及びません。そもそも目は見誤ることがありますが、道理は決して誤りがありません。日輪を観察する場合、愚かな者は目で観測して瓶の底くらいの大きさにすぎないと言います。儒者は道理によってそれがきわめて高く遠いところにあるということを計測しますから、それがこの地上を遥かに越える大きさであることがわかります。〔また〕真直ぐな木を澄んだ水の中に入れてその半分を浸すと、目でみれば曲がっているようですが、道理によって推し量ればもとより真直ぐなもので、その木が曲がっているのではない〔ということが明白な〕のです。目で見えるままに影を見ると、影を物と見なし、動いたり止まったりすると言うのです。しかし、道理で以て詳細に観察すれば、影は実際は光が当たっていないだけだということがわかります。実際に物があるのでは決してなく、まして〔それ自体が〕動いたり止まったりすることなどできましょうか。ですから、西方の学校の格言に、『耳や目や口や鼻や手足で知覚するものは、必ず心にある道理にはかり考え、心にある道理が正しいとして初めて真実なものと言える。もし道理が正しいとしなければ、知覚したものを捨てて道理に従うべきである』とあります。

人が物事の奥にある道理を明らかにしようと思うならば、他の方法はありません。外に現れているものによって内

に隠れているものを推し量り、事物のありさまによってそうである理由を証明するのです。たとえば屋根の上に煙が立ち昇るのを見たら、屋内に必ず火があることが分かるようなものです。以前、この世の万物によって、万物の主宰者がもともと存在することを証明しましたし、人の行動によって、消滅することのない霊魂が存在することを証明しました。ですから、鬼神が必ず実在することを証明するのも別の方法があるわけではありません。〔それなのに〕『死者の肉体が消滅すると精神も散滅してすっかり跡形もなくなる』などと言うのは、つまらぬ輩の言い草で、根拠とすべき道理などありません。どうして聖賢が十分に明らかにしたことを〔この上〕問題にすることがありましょう」と。

5　中士が言った、「『春秋左氏伝』に、鄭の伯有が祟りをしたことが記載されていますから[11]、きっと肉体を持って現れたのでしょう。人の魂が形体を持たないのに形体を持つ物の中に移り込むというのは、道理で以て推し量ることのできないことです。そもそも生きている時には人と異なることがないのに、死んでからは人を超えた能力を持つなどということがありえましょうか。もし死んだ者がすべて知覚能力を持つならば、子供を深く愛していた慈愛深い母親が死んだとき、毎日自分の家に住んで自分がずっと愛していた子供のことを心配しないことがありましょうか」と。

6　西士が言った、「『春秋左氏伝』に伯有が死後に祟りをしたとある以上、古代春秋時代において、人の魂は消滅しないということを既に信じていたのでしょう。それなのに、俗儒は鬼神を誹り軽んじることを務めとしました。『春秋』の罪人[12]でないことがありましょうか。そもそも人が死ぬと言うのは、魂が死ぬと言うのではありません。人の形魄、人の肉体だけが死んだというに他なりません。霊魂は生きている時は罪人が縄に縛られているようなものです。死んでしまえば暗い牢獄から出て、手足の自由を奪われた状態から解放されるようなものです。ますます事物の道理に通達し、知識も能力もますます俗人を超えることになるのは、怪しむに足りないことです。君子はそのことを知っています。ですから、死を災いや恐れるべきことだと思わずに、喜んでこれに安んじ、故郷に帰ることだと考えるのです[13]。

天主は万物を創造する時、それぞれをあるべき所に定めました。そうでなければ乱れてしまいます。死者の魂が死

んでも家に住むことができるのであれば、どうしてこれを死んだということができましょうか。試しにご覧なさい、星座は天上にあり、地上に墜ちて草や木と一緒になることはできませんし、草や木は地下から生じ、天上に昇って星座と一緒になることはできません。万物はそれぞれその所に安んじて、移動することはできません。たとえば、水の底にいる魚が餓えて死にそうになり、餌が岸の上にあったとしても、行ってそれを食べることができないようなものです。〔亡くなった〕人の魂が妻子のことをいくら思っても、家に帰ることはできません。およそ世界に戻ることができるのは、きっと天主がその人の魂によって善を勧め悪を懲らすためであり、それによって、動物の魂が散滅して元に戻ることがないのと違って、人は死んだのち魂が存続するということが証明されます。

魂は本来形体がないもので、人に現れることがあるのは、実際ではない姿[14]に仮託して現れるのです。これも別に難しいことではありません。天主が人に対して魂が死後も実在することを知らせようとしたら、このようにはっきりと示すのでありますが、それでもなお憚ることなく侮り謗り、自分が知りもしないことでもってでらためなことを説いて人々を惑わし、人は死ねばその魂は散滅して跡形もなくなる、とでたらめを言うのです。これは、そのでたらめが見分けやすいだけでなく、その人自身、死後の魂が必ずやでたらめを説いた罰を受けることになります。慎まないでよいでしょうか」と。

7　中士が言った、「人の霊魂は死後散滅すると言う者は、霊的なものを気と見なしているにほかなりません。気が散滅するには早い遅いの違いがあります。人がもしまともな死に方をしなければ、その〔人の〕気はまだ凝集したままで、しばらくたって次第に散滅していくのです。鄭の伯有〔の場合〕がそれです。[15]また、『陰陽の二気は物の形体をなし、あらゆるところに存在する。この世の中には一つとして陰陽で〔作られて〕ない物はない。だから、一つとして鬼神でない物はない[16]』と言います。貴教において、鬼神と人魂がそのようであると説かれるのであれば、私が普段聞いていることと大差はありません」と。

8 西士が言った、「気を鬼神や霊魂と見なす者は、万物の種類の実際の名称を乱すものです。教えを説く者は、万物の種類の道理を、本来の名称でそれぞれの類に当てはめます。古代の経書には気と言い鬼神と言っており、言葉が異なっていますから、当然その道理（意味）も異なっているのです。鬼神を祭る者はいますが、気を祭る者など聞いたことがありません。どうして、今の人はその名称を目茶苦茶に用いるのでしょうか。気が次第に散滅すると説いているのは、道理に行き詰まってしまって全くでたらめを説いているということがわかります。試しにお尋ねしましょう。そもそも気はいつ散滅し尽くすのですか、何の問題があって散滅するのですか。鳥獣はいつもまともな死に方をしませんが、その気は速やかに散滅するのですか、〔それとも〕次第に散滅するのですか。〔また〕どうしてこの世に戻ってこないのですか。このように、死後のことは誰も十分には知ることができないものがあります。どうしてでたらめに論じることができましょうか。

『中庸』に『〔鬼神は〕物を体して遺すべからず』とあるのは、[17]文字通りに解釈すればよろしいのです。思うに、孔子の真意は『鬼神が物を体するのは、その徳が盛んであることだ』と説いているにほかなりません。『鬼神はそのままその物である』と説いているのではありません。さらに、鬼神が物に在るということと、霊魂[18]が人に在るということとは全く違います。霊魂が人に在るのは、その内なる本質[19]であって、人の肉体と一体のものです。ですから人はこの霊魂によって道理を推論することができ、知性的存在[20]に分類されるのです。鬼神が物に在るというのは、ちょうど船頭が舟の中にいるが[21]、舟の本質ではなく、舟自体とは別々の物で、それぞれ別の種類に属するようなものです。ですから、物に鬼神が内在しても、知性的存在の段階に昇ることはできません。ただ、ある物は理性[22]がなかったり、知覚がなかったりすると、天主が鬼神に命じて[23]、それぞれがあるべき所に行くことができるように、これを導かせるのです。これが〔『中庸』に〕いわゆる「物を体す」ということに他なりません。聖明なる君主が神智[24]でもって国を治め家を斉えるのと同じです。そうでなければ、この世には一つとして知性的[25]でない物は存在しないことになります。思う

に、『この世のすべての物に鬼神が内在する』と言って、すべて鬼神を知性的とするならば、草や木や金属や鉱石なども知性的と言うことができるでしょうか。かの文王の〔時代の〕民衆が君主の恩愛に感激して、その台を霊台と呼び、その沼を霊沼と呼んだことは、[26]何ら奇妙となすには足りません。〔しかし〕もし桀王や紂王の台や沼をも霊台・霊沼と呼ぶならば、物の種類をごちゃ混ぜにして平気であると言うことになるでしょう。

物を類別する際に、貴国の学者は、金属や鉱石のように形体を持つもの、草や木のようにその上に生気を持って成長するもの、鳥や獣のようにさらに知覚を持つもの、人類のようにさらに精密で知性[27]を持つもの、と分類します。我が西欧の学者は、さらに詳細です。次の図をご覧になれば解ります。[28]ただ、他のものに依存して存在するもの[29]の種類は最も多いので、図示することが困難です。ですから、特にその内、元になる九つのものを書いています。およそ万物にはそれぞれ一定の種類があります。霊に属するものがあり、愚に属するものがあります。もし私が外国の学者に対して、中国の学者は鳥獣金石はすべて霊的なもので人類と等しいと説きます、と伝えるならば、驚愕しないことがありましょうか」と。

9　中士が言った、「わが国でも鳥獣の性は人と等しいと説く者はいますが、ただ鳥獣の性は偏っており人の性は正しいもの〔と考えているの〕であり、鳥獣は知性を持っていると説いても、その知性は微細なもので、人は広大な知性を持っている〔と考えている〕のです。ですから、その種類は異なっている〔と判断している〕のです」と。

10　西士が言った、「そもそも正しいか偏っているか、小さいか大きいかということで、物を類別することはできません。同類の中の品等を区別するだけです。真っすぐな山、傾いた山、大きな山、小さな山は何れも〔同じ〕山の類です。智恵のある者は大きな知性を得、愚かな者は小さな知性を得、賢い者は正しい知性を得、賢くない者は偏った知性を得ます。同じ〔人という〕類ではないと言えましょうか。もし小さいか大きいか、偏っているか正しいか、ということで類別することができるというのであれば、同じ人類の中に、知性の大きい小さい、正しい偏っているの違い

があって、数えきれないほどの種類があることになります。万物分類の図を見ますと、世の中には有ると無いの二つだけで異なるものとの類別ができるのです。試しに述べてみましょう。形体の有るものが一つの種類で、形体の無いものが別の種類です。生命の有るものが一つの種類で、生命の無いものが別の種類です。道理を推論することができる〔能力が有る〕ものが人類の本質です。ですから、この世の〔他の〕万類は道理を推論することができないのです。人類の中には、〔道理を〕推論するのに正しいか偏っているか、小さいか大きいかという違いがありますが、推論することができる種類に属することは同じであって、〔推論の能力に〕精粗の違いがあるだけです。もし鳥獣の本性は本来知性的であると言うならば、〔その知性が〕偏っていたり小さかったりしても、人類と同類であるということになります。しかし、類似のものを本物と見なしたり、外から加わったものを内なる本質と見なしたりすべきではありません。たとえば、銅の漏刻（水時計）が時を刻むのを見て、ただちに銅〔の中〕の水は本来霊的であると言うことができましょうか。〔また〕将軍は知謀を備えて軍隊を保持して敵を破り、兵卒はその命令に従って進んだり退いたり隠れたり突撃したりして戦果を挙げます。兵卒が本来持っている智恵によるもので外から導かれたものではないと誰が言えましょう。物の類別に明らかな者はそれぞれの行動を見て、その本来の姿を十分に観察して、その心が及ぶところを悟りますから、鳥獣が〔霊的な行動をしても、それは〕鬼神（天使）が密かに誘い導いて天主の命令を行なうもので、自然とそうなるが、なぜそうなるかは分からず、自主的な意志によるものではない、ということが解るのです。わが人類は自分自身で主宰することができ、物事を行なう際、常に本来備えている霊妙な意志を用いるのです」と。

11　中士が言った、「たとえこの世の万物は一つの気を共有すると言っても、物の形象は同じではありません。これによってそれぞれ分類するのです。[30]たとえば我が身は肉体に他なりません。肉体の内外は天地陰陽の気でないものはありません。気は物を造り、物は種類によって異なります。たとえば水の中にいる魚は、外の水と腹の中の水は同じです。うぐい（鯉科の淡水魚）の腹の中の水と鯉の腹の中の水は同じですが、その形象は常に同じではありませんから、

魚の種類も異なっているのです。ですから、この世の万物の形象を見れば、万物の種類を明らかにすることができます」と。

12 西士が言った、「もし形象だけで物を分類するならば、これは物を類別したことではなく、形象の分類をしただけです。形象は物その物ではありません。形象で物を分類して、その本質で分類しないならば、犬の本性も牛の本性と等しく、犬や牛の本性も人の本性と等しくなるでしょう。これでは告子の後にまた告子が登場することになります。[31] 泥をこねて虎や人の形を造り、この二つのものは形象が異なると言うのはよろしいが、本物の虎と人間を〔指して〕形象が異なるだけだと言うのは正しくはありません。形象によって物を分類する場合、〔形象が〕おおよそ同じであれば、別の類であると言うことはできません。もし泥の虎で泥の人と比べてみれば、その形象は異なっていますが、それが泥の類であるということでは同じです。もし気を霊魂[32]とし、生きることの基礎とすれば、生きている者はどうして死ぬことがありましょう。物が死んだ後も、気はなお内外に充満しており、どこで気を離れることができましょう。経伝に『〔最初は〕わずかな違いでも〔結果としては〕大きな相違となる』[33]とあります。気が四元素[34]の一つであることを知らずに、これを鬼神や霊魂と同じだとするのは怪しむに足りません。〔しかし〕もし気が〔四元素のうちの〕一元素であることを知っているのであれば、その本質と作用とを説くのは難しいことではありません。そもそも気は水と火と土の三元素と合わさって万物の形を形成するもので、霊魂は人の内なる本質で、一身を主宰するものであり、呼吸によって気を出入させるものです。思うに、人と鳥や獣とはみな気を内から生じて心中の火（熱）を整え涼しくするために働かせます。ですから、いつも呼吸をして息をするごとに気を入れ替えて熱を出し、涼しくして生きているのです。魚は水中に潜っており、水の性質は非常に冷たいので、外から沁（し）みわたらせて中の火（熱）を涼しくします。ですから、魚類はたいてい呼吸器官がないのです。

そもそも鬼神は物の本質ではありませんし、他の物と区別する形体はありません。その本職は天主の命令によって

造化の仕事を司るだけで、世を支配する権能は持ちません。ですから孔子は『鬼神を敬うが、遠ざける』[35]と説いているのです。幸福を与えることや罪を免かれることは、鬼神ができることではなく、天主〔の力〕によるだけです。それなのに世間の人々は、鬼神によってそれを得ようと、諂ったり侮ったりしますが、それは正しい方法ではありません。そもそも『鬼神に近付かない』と『天に対して罪を犯すのであれば祈ることをしない』[36]とは同じこと〔を言っているの〕です。どうして『遠ざける』を『無視する』と解釈して、孔子は鬼神を否定したという疑惑を持つことができましょう」と。

13 中士が言った、「古代の儒者はこの世の万物の本性はみな善であり、変更することのできない広大な道理がすべてに備わっていることをよく知っており、物には大小〔の違い〕があってもその性（本質）は一体であると考えましたから、天主・上帝はそれぞれの物の内部にあって物と一体であると言っているのです。ですから人々に対して、悪を行なって本来自己に備わる善を害うことなく、義に背いて本来自己に備わる道理を犯すことなく、物を害って心の内なる上帝を欺いてはならない、と勧めています。また、『人と物が消滅しても本性は滅びることなく、死んで天主のもとに帰る』と言っています。これも人の魂が不滅であるということです。ただ、先生が天主について論じておられることとは合致しないようではありますが」と。

14 西士が言った、「今のお言葉の誤りは前に聴いたものと比べて遥かにひどいものがあります。どうして〔天主の教えと〕合致しましょうか。私は敢えてこれによって我が天主の尊大さと比べたりはしません。『聖書』[37]には〔次のような〕言い伝えがあります。昔、天主は天地を創造し、諸天使[38]の類を生み出した際、ルチフェルという大天使がいましたが、自らがかくも霊明であるのを見て、傲慢にも『我は天主と同等であると言うことができる』と言いました。天主は怒ってその〔ルチフェルの〕従者である数万の天使と一緒に彼を悪魔[39]の姿に変え、彼らを地獄に降しました。これ以後、この世の中に初めて悪魔が生まれ、地獄が生じたのです。[40]そもそも物と創造者は同じであると言うのは、ル

チフェルの傲慢な言葉であり、一体誰がこんなことを述べましょう。世間の人は仏教のでたらめな経文を禁止しないために、知らず知らずのうちに、その毒のある言葉に染まっているのです。周公や孔子の教えや中国の古代の経書には、天地[41]を軽んじてこれと同等になるものがありましょうか。もし庶民の中につまらぬ男がいて、天子と同じように尊大であると説いたならば、どうしてその罪を免れましょう。地上の民は妄りに地上の君主と肩を並べることなどできませんのに、まして天の上帝と等しくなれましょうか。人が人に対して『あなたはあなた、私は私だ』と言うことはあっても、もしどぶの中の虫が上帝に対して『あなたは私、私はあなただ』と言うならば、この上もない高慢背逆と言わないことがありましょうか」と。

15 中士が言った、「仏教は上帝より劣るものではありません。人身を尊び、人徳を尊ぶことにおいては、取るべきものがあります。上帝の徳はもとより厚いものですが、我々〔人間〕もこの上もない徳を具有します。上帝はもとより量ることのできない能力を具有していますが、我々〔人間〕の心も万事に対応することができます。[42]試しにご覧なさい、聖人は根元〔の気〕を調整して事物を開発し、教説を立てて人倫を明らかにし、耕作機織によって人民を養い、舟車財貨によって人民に利益をもたらし、経世の土台を据え、万世不変の大いなる道を示し、天下は永久にこれに頼り安んじるのであり、上帝が古来の聖人を軽視して自ら作ったり植えたりしてこの上もなく治まった状態にするなどとは聞いたこともありません。このことから論じるならば、人の徳性や能力は上帝でさえも超えることのできないものがあります。どうして天地を創造するのは天主だけが可能であるなどと言えましょうか。世間の人々は自己の心の霊妙さを知らず、心は身体の中に限定されると言います。仏教は、心の広大さを認め、自ら卑下することがありませんから、我が身と天地万物とはすべて心に包括され、この心はどんな遠いところにも及び、どんな高いところにも昇り、どんな広いものをも包み、どんな細かいものにも入り、どんな堅いものをも貫くことができると考えます。ですから、感覚器官とその働きを備えた者は、自己の心に天主が厳然と存在することを知らなければなりません。〔それが〕

天主でなければ、どうしてこのようなことが可能でしょうか」と。

16 西士が言った、「仏教は自己を知りません。どうして天主を知っていましょう。彼らは、微々たる我が身でありながら天主から聡明さを頂き、たまたまわずかな才能を持ち、わずかな行為をなしただけで、誇らしげに睥睨し、勝手に自らを天主の尊大さになぞらえます。どうしてこれが『自らの人身を尊び、自らの人徳を尊ぶ』者でありましょう。むしろ、我が身を卑しめ、我が徳性を失うだけです。高慢さはすべての徳の敵です。[43] 少しでも心に高慢さが生じるならば、すべての行為が駄目になります。西洋の聖人がこう言っています、『心に謙遜がなくて徳を積むのは、風に向って砂を積み上げるようなものです』[44]と。聖人は謙遜を尊んでいます。天主に対して謙遜でなければ、どうして人に対して謙遜でありえましょう。聖人は謹み励んで天の賞罰を畏れます。[45][46] 死後の世の中で誰も知る者がないのとは天と淵、火と水ほどの違いがあります。聖人はあえて聖人の位に居て、普通の人を天主になぞらえたりしましょうか。

そもそも徳性は我が身を修めることに始まり、上帝に仕えることにおいて完成します。周〔王朝〕の徳性は上帝に仕えることを務めとしましたのに、今〔の世の人が〕畏れ慎んで敬い仕えるべきものに対して『私と等しい』と言うのは、何とひどく背くものではありませんか。思いますに、〔聖人が〕多くの物を成し遂げるに至っては、天主がすでに形作った物によってその素材に応じて作り上げるのであって、もともと何もないところから作り出すことができるものではありません。それは器を造るのと同様です。陶工は金を以てし、大工は木を以てしますが、金や木の形体が先ず備わっているのです。〔そのものの〕形体がなくて、その形体をあらしめることなど、どうして人にできましょう。人が人を教育するのに、その性に従って教えるのは、本来その人に性がなくて性があるようにさせるのではありません。天主が万物を創造するのは無から有を生じ、ひとたび命令することによって万物が生じるのです。ですから、『無限の能力』と言うので、人間とは大変異なっています。それに、天主が万物を創造するのは、朱印を紙や布に押印するようなものです。紙や布の印はこれを印〔そのもの〕とすることはできません。これは印の跡にすぎません。人間

や万物の道理はすべて天主の跡です。もしこれをもとの印にひきあて、更に多くの物に押印しようと思うならば、誤らないことがありましょうか。智者の心には天地が含まれ万物が備わっていますが、本当の天地万物の姿形ではありません。ただ仰いでは天を、伏しては地を観察し、その形を考察してはその道理に到達し、その根本を求めてはその作用を完成させるだけです。ですから、目で見ていないものは、心にその像を結ぶことはできません。もし明鏡や止水が万物を映すので、明鏡や止水には等しく天地が備わっており、これらを造ることができるというのであれば、そんなことは可能でしょうか。必ず言葉と行動が一致してこそ信じることができます。天主は万物の根源であり、万物を生じるもので、もし人が天主と同じであれば、きっと万物を生じることができるにちがいありません。しかし、一体誰が山や川を一つでも生み出すことができるでしょう」と。

17　中士が言った、「あなたが言われる天地を生じる天主と、万物を養う天上の天主とは仏教で言う『我』[47]のことでしょう。『我』は、昔と今も、上と下も何ら区別はありません。つまり全く一体なるものです。ただ、地・水・火・風の四元素（四大）が沈み暗くなることによって、実態は事に従って移り、本質は日々に崩壊し、徳性は日々に弛緩して、我が天主も併せて沈み溺れてしまうものですから、私が物を造り養うことができないのは、その本質によるものではありません。その流れがそうさせるだけです。夜光の珠玉も塵や汚れでその価値を損ないます。その本来の姿を追究して初めて分かることができます」と。

18　西士が言った、「ああ、何とひどいことでしょうか。この毒のある唾が吐かれてから、世の中の人々が競ってこれを貪り食うのは悲しむべきことです。道理に暗いことの極みでなければ、誰が万物の根源、天地の霊が物に暗まされているなどと言えましょう。そもそも人徳は堅固で純粋なもので、磨いたり染めたりすることによってその真実の体を変えることはなく、物の機能は固定的なもので、動かし変えることによってその不変の則を失うことはありません。並ぶもののない最高に大きなもの、この上もない最高に尊いものは、人生の幻の体によって煩わしたり汚し惑わした

りすることができましょうか。それは人が天に勝ち、欲が理に勝ち、精神が肉体の使役となり、情が性の根本になることであり、〔ものごとの〕本末を知っている者は教えなくても自ずと分かることです。さらに、両者を比べるに、どうして造物者を越えるものが、四元素にとらわれ落ち込み、晦まされ溺れることがありましょう。そもそも天上の天主が自己と一体であるからには、純粋と混乱の二つのものも違いがありません。たとえば、上なる霊魂[48]も心の内なる霊魂[49]も共に一体であるようなものです。ですから、ひどい苦しみに遭ったり非常な出来事に遇ったりして、上なる霊魂[50]が混乱すると、心の霊魂[51]も混乱するもので、一方が乱れ一方が治まるということはありません。今、私の心が乱れても、天上の天主の永遠なる純粋さを乱すことはできません。私の心が乱れるのを免れないのであれば、私と天主が一体のものではないことが、どうして明らかでないことがありましょうか。

そもそも『天主と物とは同じである』と言うのには〔次の三つの考え方がありますが〕、ある者は『天主はとりもなおさずその物であり、他に何かあるわけでない』と言い、〔また〕ある者は『〔天主は〕その物において内なる本質の一つである』と言い、〔さらに〕ある者は『物は天主が使用するもので、機器が職人に使用されるようなものである』と言います。この三つの発言は、すべて道理を損なうものであり、私は逐一論弁いたしましょう。

『天主はとりもなおさずそれぞれの物である』と言うならば、宇宙の間に万物があっても、異なった性はないはずです。異なった性がないからには、万物〔といった違い〕も存在しません。どうして物の道理を混乱させないことがありましょう。まして物には不変の実体があり、すべて自己を全うすることを願い、自己を害うこと（そこな）を願いません。〔ところが〕天下の物を見ますと、互いに害い互いに殺すものがあります。たとえば、水は火を消し、火は木を焼き、大きな魚は小さな魚を食べ、強い鳥は弱い鳥を食べます。天主がとりもなおさずそれぞれの物であるならば、どうして天主は自らを害い傷つけて少しも保護しないことがありましょうか。しかし、〔そもそも〕天主には〔何かを〕害い傷つけるなどという道理はないのです。この説に従えば、私の身がそのまま上帝（天主）であり、私が上帝（天主）

を祭るというのはそのまま自己を祭ることになります。いよいよもってこのような礼はありません。もしそうであれば、天主は木や石などの物と言うことができますが、誰がこのようなことを聞き入れることができましょうか。[52]

『天主はその物の内なる本質である』と言うならば、天主は物より小さいことになります。およそ全体であるものは必ずそれぞれの部分であるものより大きいものです。一斗は一升より大きく、一升は一斗の十分の一にすぎません。外側のものは内側のものを包みます。もし天主が物の内にあって、その本質であるならば、物は天主よりも大きく天主の方が小さいということになります。万物の本源がその生じる物より小さいなどと、そんなことがあるでしょうか。どうしてそんなことがあるでしょうか。お尋ねしましょう、天主が人の中にあって内なる本質であるならば、身分の貴い主人であるのでしょうか、それとも身分の低い使用人であるのでしょうか。もし〔天主が〕身分の低い使用人であって他のものの命令を聴くというのであれば、もちろんそんなはずはありません。もし〔天主が〕身分の貴い主人であって一身を自由にする力を握っているならば、天下には一人として悪を行なう者がいないはずです。どうして悪を行なう者がこんなにも多いのでしょうか。天主は善の根源です。その徳は純粋で混じりけはありません。〔天主が〕一身の主宰でありながら、私欲に蔽われ邪悪なことを行なうというのでは、その徳は何と衰えたことでしょうか。天地を創造した時には全てが節度にかなった行為であったのに、[53]今や一身の行いを司るのに、どうして節度にかなわないなどということがありましょう。また〔天主は〕多くの戒律の根本であるのに、戒めを守らない者がいるのは、守ることができないのでしょうか、守ることを知らないのでしょうか、守ろうと思わないのでしょうか、守ろうとしないのでしょうか。〔天主が内なる本質であるというならば〕いずれもそうだと言うことはできません。

『物は器であって、ちょうど職人が機械を使用するように、天主がそれを使用する』と言うならば、天主は決してそのもの自体ではありません。石工は鏨（たがね）ではありませんし、漁師は網でも舟でもありません。〔同様に〕天主はその物ではありません。どうして一体であると言えましょう。このことから論弁しましょう。その説では、『万物の行動は物

には関係なく、全て天主の〔行なう〕事であり、機器の働きが全て機器を使う人の働きであるようなものだ』と言います。〔この考えによれば〕鋤が田を耕すと言わず、農夫が耕すと言い、斧が柴を刈ると言わず、樵が刈ると言い、鋸が板を切ると言わず、大工が切ると言うのですから、火が焼くのではなく、水が流れるのではなく、鳥が啼くのではなく、獣が走るのではなく、人が馬に乗り車に乗るのではなく、全て天主がするということになります。〔そうなると〕小人が壁に穴をあけ、垣根を乗り越え、旅人を野原で待ち伏せ〔して盗みを働くこと〕をするのも、その者の罪ではなく、むしろ天主がその罪を犯させているということになります。どうしてその人を憎んだり恨んだり、懲らしめたり殺したりすることができましょう。善を行なう人も、全てその人の功績ではないのですから、どうしてその人を称賛することができましょう。天下を乱すもので、この言葉を信じるより甚だしいものはありません。

まして、全ての物は天主を本質としていませんから、散滅しても天主に回帰することはなく、それが結びついている物の類に回帰するだけです。もし〔物が天主を本質としていて〕物が壊れて無くなり全てその本質に回帰するならば、天主に回帰することになりますが、それは『壊れて無くなる』とは言いません。それどころか、生命を増し人間を完成することになるのですから、一体誰が早く死んで上帝（天主）のところに帰ることを喜ばないでしょうか。孝子は親のために手厚く棺桶を用意します。〔人が死んで天主になるのであるならば〕どうして亡くなった父母が速やかに変化して上帝（上尊）となるようにさせないでしょうか。

〔私は〕前に天主が万物を創造する者であるということを証明しました。その本性は渾然と成就しており、〔他の〕物は測り知ることができません。まして、これを〔万物と〕同じであると言えましょうか。それぞれの物を詳しく調べてみますと、その性が善で理が精密なるものは、天主の〔創造の〕形跡であると言うことはできます。〔しかし〕これを天主であると言うのは誤りです。たとえば、道に大きな足跡が印されているのを見たら、大きな人の足がここを通ったということは分かりますが、その足跡を大きな人〔そのもの〕とすることはできません。〔また〕精妙な絵画を

観て、その画家を慕って名人の芸術だと言っても、それをそのまま〔その〕画家であるとするわけにはいきません。天主は森羅万象を造られましたが、我々がその本源を推測すれば、この上もなく精密で立派で、仰ぎ慕って止むことがありません。もし偏った説に捉われてその本源を忘れるならば、大変な誤りと言えます。その誤りの元は他でもなく、物の存在原因[56]をわきまえていないことによるのです。存在原因には、物の中にあるものがあります。陰陽の気などがそれです。〔また〕物の外にあるものがあります。始動因[57]などがそれです。天主が物を造るのは、その普遍的始動因[58]ですから、物の外にあるものです。ただ、その物における在り方は一様ではありません。ある場合はその物の場所になります。人が家にいたり庭にいたりするようなものです。ある場合はその物の部分になります。手足が体にあったり、陰陽〔の気〕が人にあったりするようなものです。ある場合は他のものによって存在するものが、それ自体で存在するものの中にあります。白い色が馬にあると白馬になり、寒さ（つめた）が水にあると氷になるようなものです。ある場合は物の存在原因が存在の姿にあります。日光がそれが照らす水晶の中にあり、火がその赤く焼くところの鉄にあるようなものです。末端から始原を推し測るならば、天主は物にあると言うことができましょうか。光が水晶にあり、火が鉄にあっても、それぞれの物、それぞれの体の本性は混じるものではありません。天主が物にあって、このようであると言うのはもとより問題はありません。しかし、光は水晶を離れることがありますが、天主は物を離れることがありません。天主は形体はありませんがあらゆる所に存在し、はっきり物と区別することはできません。ですから、全体は全体の中にあると言ってもよいですし、全体はそれぞれの部分にあると言ってもよいのです」と。

19 中士が言った、「明快な議論をお聞きして、先の疑問は氷解しました。〔ですが、中国には〕天下の万物は全て一つであると説く者がおりますが[59]、いかがでしょうか」と。

20 西士が言った、「人を天主と同一であると言うのは過大評価ですが、人を物と同一視して土や石と同じであるとするのは過小評価です。前者の誤りによれば、人が禽獣になろうとすることを怖れ、後者の誤りによれば、人が土や石

になろうとしないことを怖れます。そもそも人類が土や石になろうとすることに、あなたは従われますか。信じることのできないことは、論弁しにくいものではありません。この世界の中で同じであるというものは沢山存在します。名称が同じで実物は異なるものがあります。柳宿（星座の名称）と柳樹（木の名称）というような場合がそれです。また、群れが同じで、個別のものが一緒に集まって一つになっているものがあります。一つの羊舎の羊が同じ群れであり、一つの軍隊の兵隊が同じ軍隊であるというような場合がそれです。また、道理が同じものがあります。根と泉と心の三者は互いに同じです。つまり、根は多くの枝の本であり、泉は多くの流れの源であり、心〔臓〕は多くの血脈の拠り所であるというような場合がそれです。以上三つの場合は取り敢えず同じと言っても、実は異なっています。また、性質が同じものがあります。[60] 鳥獣がすべて知覚を有してそれぞれの種類に属しているというような場合がそれです。また、類が同じものがあります。この馬とあの馬が共に馬の類に属し、この人とあの人が共に人の類に属しているというような場合がそれです。以上の二つの場合はほぼ同じと言うことができます。また、体が同じものがあります。四肢と体〔全体〕が同じ一つの体に属しているというような場合です。また、名称は異なりますが実物は同じというものがあります。放勲と帝堯は二つの名前ですが一人のことであるというような場合です。以上の二つの場合は本当に同じものです。そもそも天下の万物がすべて同一であるというのは、この三つの場合のどれを指しているのですか」と。

21　中士が言った、「体が同じという場合を言ったものです。『君子は天下の万物を以て一体と為す者なり』[61] と言います。形体を隔て、汝と我を分ける者は小人です。君子が万物を一体とするのは作為によるのではなく、我が心の仁なる本体がこのようであるからです。君子だけがそうであるのではなく、小人の心もそうでないことはないのです」と。

22　西士が言った、「前代の儒者は万物一体の説によって、愚民が喜んで仁に従うことを助けています。いわゆる一体とは、根源が同一であるということを言っているだけです。もしこれを真に一体であると信じるならば、かえって仁

義の道を滅ぼすことになります。どうしてそんなことがありましょう。仁義がなされるのは必ず〔異なる〕二つのものがあるからです。もし多くの物を本当に一体とするならば、多くの物を本当に一物とみなしながら、虚像によって異なるとしているだけということになります。虚像であればどうして互いに愛し互いに敬することができましょう。ですから、『仁を為す者は己れを推して人に及ぼす』[62]『仁者は己れを以て人に及ぼす』[63]『義は人が老人を老人とし年長者を年長者と〔して尊敬〕することである』[64]と言っているのです。すべて人と己れの違いを除いてしまえば、仁義の道理をすべて除くことになります。もし物はすべて己れであると言うならば、己れを愛し己れに仕えることだけを仁義とすることになり、小人は己れの存在だけを意識して他者の存在を意識しない者ですから、小人だけが仁義を行なえることになります。人と己れと書くのは、ただ形体を言うだけでなく、形体と本性とを合わせて言うことにほかなりません。そもそも仁徳が厚いのは遠く〔にまで及ぶこと〕にあって、近くに〔しか及ばないもので〕はありません。身近な本体を愛するのは、知覚のないものでもできます。ですから、水が常に低いところを潤し、湿ったものと同類であるのは、本体を存養するからです。火が常に高いところに昇り、乾いたものと同類であるのは、本性を全養するからです。身近に親しむものを愛するのは、鳥獣でもできます。ですから、跪いて乳を飲ませたり食物を口移ししたり[65]します。身近に自分の家族を愛するのは、小人でもできます。ですから、いつでも、苦労して険しいところを行き窃盗を行なって自分の家族を養う者がいます。身近に自分の国を愛するのは、凡人でもできます。ですから、いつでも、多くの兵隊が命を賭し強敵や邪悪な者を防ぎます。ただこの上なく仁である君子だけが、遠くにまで愛を及ぼし、余すところなく〔その愛で〕天下万国を包み覆うことができます。君子はどうして自分が一つの体、他人が一つの体であり、これが我が家、我が国、あれが他の家、他の国であることを知らないことがありましょうか。しかし、すべて天主・上帝が生み養う民と物であるから、切実にこれをも併せて哀れみ愛さなければなりません。どうして小人のように自分の骨肉だけを愛するでしょうか」と。

23 中士が言った、「万物を一体と見なすのは仁義を害うものであると言われますが、ではどうして『中庸』では『群臣を体す（受け入れる）』ということを九経の中に数えているのでしょうか[66]」と。

24 西士が言った、「〔万〕物を〔一〕体〔と〕するというのを比喩で説くならば問題はありません。〔しかし、〕実際の事として説くならば大変道理を害うことになります。『中庸』では君主に対して群臣を体する（受け入れる）ことをさせるのです。君主と臣下は同類の者です。どうして草木や瓦石をすべて体することができるでしょうか。私はこのように聴いております。君子は物に対しては、これを愛しますが仁しみません[67]。今、他人に対して一体であるとするならば、必ず等しくこれを仁しむべきであるということになります。墨翟が他人を兼ね愛したことに対して、先儒はこれを非として論弁しました[68]。今、土や泥をも仁しむことを勧めて、今の学者が是として〔これに〕従うのは、何ということでしょうか。天主が天地万物を作られましたが、その万物のあり方は様々であって、根元は同じで種類が異なっていたり、種類は同じで性質が異なっていたり、性質は同じで作用が異なっていたりします。今、これをむりやり一体にしようとするならば、造物者の意志に逆らうことになります。物は多くあることをよしとします。ですから、貝を集める者は貝が多いことを望みますし、古い器を集める者は器が多いことを望みますし、味を好む者は味が多くあることを望みます。もし天下の物がすべて赤い色であったら、嫌にならない者がありましょうか。赤や緑や白や青であるから、毎日見ても厭きることがありません。もし音楽の音色がいつも宮であったら、誰が聴きましょう。宮や商や角や徵や羽[69]であるから、これを聴いて三ヵ月間、食事の味も忘れるほどになるのです[70]。外にあるものでもこのようなのですから、内にあるものがどうしてそうでないことがありましょうか。

私は前に、それぞれの物の種類はその本性によって異なるもので、形象によって異なるものではないということを明らかに説明しました。ですから、石の獅子と本物の獅子とは姿形は同じですが、種類は異なります。石の人間と石の獅子とは姿形は異なりますが、種類は同じです。なぜならば共に石の種類だからです。かつてお聴きしたことです

が、あなたは種類と形体の実情を解説して、それ自体で存在するものは、形体が同じものはもちろん種類が同じですが、種類が同じものは必ずしも形体が同じではありません、と言われました。また、形体全体の行為はすべて形体全体に帰しますが、併せてそれぞれの肢体をも指します。もし右手が患難を助けることができれば、一身の両手が慈悲を讃えられます。左手が盗みを習えば、左手だけが悪者というのではなく、右手も含めて全体がみな悪者ということになります。この説を推していけば、天下の万物は一体であると言えば、世間の人の行いはすべて相互に言うことができることになります。盗跖（とうせき）一人が盗みを働いても伯夷も一緒に盗人と言うことができ、武王一人が仁を行なっても紂王も仁と言うことができます。[71] 形体が同じであるから同じということになります。どうしてそれぞれのものの本来の姿[72]を交えないことがありましょうか。学者は物の本質を論じて、同体としたり別の体としたりします。どうして多くの物を並べて同体としましょうか。思うに、物は互いに連なっていれば同じ体で、互いに切れていれば別の体です。一つの川の水が川の中にあれば、川の水と一体ですが、一勺〔の器〕の中に注げば一勺〔の器の中〕の水は川の中の水と同類であると誰が言えましょう。それでもなお同体と言うことができましょうか。天地万物一体の論にとらわれると、上帝をおろそかにして賞罰をごちゃまぜにし、類別を取り除いて仁義を滅ぼすことになります。〔たとえ〕高士がこれを信じても、私は批判しないことがありましょうか」と。

25 中士が言った、「明晰な議論は明らかで、疑いを晴らし異論を排した正しい教えです。人魂が不滅で他の物に変化することがないことは既に説明をお聴きしました。仏教の六道輪廻・戒殺生の説は聖〔なる天主の〕教には関係がないと聴きます。〔このことについて先生は〕必ずやお教えになられるでしょう。[73] どうか明日、お教え頂きたい」と。

26 西士が言った、「〔大きな土の盛り上がりである〕丘陵が平らになってしまえば、〔小さな土の盛り上がりである〕蟻塚がどうして存在しえましょう。私は長い間このことを分析することを願っていました。あなたが聴きたいことは、私が喜んでお話するところです」と。

（上巻終り）

【注　釈】

(1) 原文には「真理」とある。ここで述べている「み教え」とは、第三篇に見える「霊魂の不滅」を論じた西士の説明を指す。

(2) 『中庸章句』（もと『礼記』中庸篇）の十六章に「鬼神の徳為る、其れ盛んなるかな。…天下の人をして斉明盛服し以て祭祀を承け、洋洋乎として其の上に在ますが如く、其の左右に在ますが如くせしむ」とある。

(3) 『尚書』盤庚中篇に、「政を失して茲に陳し。高后、丕に乃ち崇に罪疾を降して曰く、何ぞ朕が民を雪ぐる、と」とある。

(4) 『尚書』盤庚中篇に、「茲に予に政を乱め位を同うして乃の貝玉を具うるのみなるもの有り。乃の祖、乃の父、丕に乃ち我が高后に告げて、丕なる刑を朕が孫に作せと曰い、高后を迪きて、丕に乃ち崇いに弗祥を降さん」とある。

(5) 『尚書』西伯戡黎篇に、祖伊が紂王を諫めて「天子よ、天、既に我が殷の命を訖てり。格人、元亀、敢えて吉を知る罔し。先王の我が後人を相けざるに非ず。惟だ王、淫戯用て自ら絶てり」とある。祖伊は殷の紂王の賢臣の名前。

(6) 『尚書』金縢篇に、周公は「予、仁、考に若う。能く多才多芸、能く鬼神に事う」とある。

(7) 『尚書』金縢篇に、「我、之を辟けざれば、我以て我が先王に告ぐる無し」とある。

(8) 『尚書』召誥篇に、「天、既に遐く大邦殷の命を終う。茲れ殷は哲王の天に在るもの多し。厥の後王後民に越て〔茲れ厥の命に服〕す」とある。

(9) 『毛詩』の大雅文王篇に、「文王、上に在り、於天に昭らかなり。文王陟降して帝の左右に在せり」とある。

(10) 朱子は『中庸章句』第十六章の注で「程子曰く、鬼神は天地の功用にして造化の跡なり、と。張子曰く、二気の良能なり、と。愚謂えらく、二気を以て言えば則ち鬼は陰の霊にして、神は陽の霊なり。一気を以て言えば則ち至りて伸ぶる者は神と為り、反りて帰る者は鬼と為る。其の実、一物なるのみ」と述べている。程子は程伊川を、張子は張横渠を指す。朱子及び程子の鬼神論については、拙稿「陰陽の霊としての鬼神—朱子鬼神魂魄論への序章—」（『哲学年報』第五十輯、一九九一）、「二程的鬼神観」（『東亜文化的探索—伝統文化的発展—』正中書局、一九九六）を参照。

(11) 『春秋左氏伝』昭公七年の伝を参照。

(12) 『孟子』告子下篇の「五霸は三王の罪人なり。今の諸侯は五霸の罪人なり」という表現を踏まえる。

(13) 第三篇の**2**に「我々の本当の住まいは現世にはなく来世にあり、人〔の中〕にではなく天〔主の中〕にあるのです」とあるを参照。

(14) 原文には「虚像」とある。

(15) 『朱子語類』巻三に「人が病死すればその気は散滅する。刑死や急死すると気は散滅せずに残るが、最後は散滅してしまう」とあ

る。

(16) 『中庸章句』第十六章の朱子の注を参照。
(17) 注（2）を参照。
(18) 原文には「魂神」とある。
(19) 原文には「内本分」とある。
(20) 原文には「霊才」とある。首篇の4に「そもそも人が鳥や獣と異なる最大の理由は、知性（原文は「霊才」）にあります」とある。
(21) 首篇の6に「人の姿は見えなくても、舟の中に舵を執る勝れた船頭がいて、棹をさして舟を操り…」とある。
(22) 原文には「霊」とある。
(23) ここの「鬼神」は、「天神」（天使）の意味で使われている。
(24) 原文には「神」とある。
(25) 原文には「霊」とある。
(26) 『孟子』梁恵王上篇にある。
(27) 原文には「霊才」とある。
(28) 原文ではこの後に「物宗類図」が図示されるが、本稿では紙面の都合で文末に掲げた。
(29) 原文には「依頼〔者〕」とある。それ自体で存在するものを「自立者」という。第二篇の16を参照。
(30) 以下の文は、『朱子語類』巻三（明版六丁）の語を踏まえる。
(31) 『孟子』告子上篇で、告子が「生、之れを性と謂う」と言ったのに対して、孟子が「然らば則ち犬の性は猶お牛の性のごとく、牛の性は猶お人の性のごときか」と反論したことを踏まえる。
(32) 原文には「神」とある。
(33) 『礼記』経解篇に「易に曰く、君子は始めを慎む。差うこと毫釐の若くなるも、繆うに千里を以てす、とは此れ之の謂いなり」とある。原文には「伝に云う…」とある。
(34) 原文には「四行」とある。第二篇の16、第三篇の8に見える。
(35) 『論語』雍也篇に「鬼神を敬して之を遠ざく」とある。
(36) 『論語』八佾篇に「罪を天に獲れば祈る所無きなり」とある。
(37) 原文には「天主経」とある。第三篇の14には「天主正経」、第八篇の8には「天主経典」とある。

(38) 原文には「諸神」とある。「神」は「天神」のことで、天使を指す。
(39) 原文には「魔鬼」とある。
(40) 「ルチフェル」(Lucifer) は元来「明けの明星」(金星) を指す。『旧約聖書』の預言者イザヤは、バビロン王の滅亡・審判についての託宣の中で、王をこの明けの明星に例えて次のように説いている。「ああ、お前は天から落ちた明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた、もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。『わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂に登って、いと高き者のようになろう』と。しかし、お前は陰府に落とされた、墓穴の底に」(「イザヤ書」第14章12〜15節)。悪魔が堕落した天使であるということについては、『新約聖書』の「ペトロの手紙 二」第2章4節には「神は罪を犯した天使たちを容赦せず、暗闇という縄で縛って地獄に引き渡し、裁きのために閉じ込められました」とあり、また「ユダの手紙」6節には「(主は) 一方、自分の領分を守らないで、その住まいを見捨ててしまった天使たちを、大いなる日の裁きのために、永遠の鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込められました」とある。また、トマス・アクィナス『神学大全』第六十三問題を参照。『聖書』からの引用は、すべて日本聖書協会発行の『聖書』新共同訳 (共同訳聖書実行委員会編、一九八七) による。
(41) 原文には「后皇」とある。
(42) 朱子は『大学章句』の中で、「明徳は、人の天より得る所にして、虚霊不昧、以て衆理を具えて万事に応ずる者なり」と述べている。
(43) 『新約聖書』の「ヤコブの手紙」第4章6節に「それで、こう書かれています。『神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる。』」とあり、16節に「ところが、実際は、誇り高ぶっています。そのような誇りはすべて、悪いことです」とある。6節の言葉は『旧約聖書』の「箴言」第3章34節に「主は不遜な者を嘲り、へりくだる人に恵みを賜る」とあるを踏まえる。また、注(44) を参照。
(44) 聖グレゴリウス一世の言葉。その著『福音書講話』(XL HOMILIARUM IN EVANGELIA) 第7講話 (HOMILIA VII) に、「いかなる偉業を行おうとも、もし謙遜によって味をつけられていなければ、無に等しい。事実、すばらしい行為も高慢な心から行われるなら、人を高めないだけでなく、かえって低くする。謙遜なしに徳を集めようとする人は、向かい風に向かって砂を手に携えて歩く人に似ている。こうした人は、携えているように見えるものによって、ますます目がつぶれてしまうのである」とある (熊谷賢二訳『キリスト教古典叢書16・福音書講話』創文社刊による。但し、本書では「四 洗礼者ヨハネの告白」と編次する)。『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」第1章19〜28節についての講話 (説教) で、「ヨハネの謙遜」が説かれ、「善行の根である謙遜」が論じられている中に見える。また、次のようにも述べている。「聖人はこのように、弱点を常に考え、長所のゆえに高ぶらないよう努めて

いる。事実、知識は徳であるが、謙遜は徳を保護するものでもある。したがって、わたしたちは、どのような知識を身につけていても、自分を低くしなければならない。それは、知識という徳が集めたものを、高慢という風に吹き散らされないようにするためである」。グレゴリウス一世（五四〇頃～六〇四）は、西方キリスト教会の教会博士で四大教父の一人。ローマ帝国末期、五九〇年から六〇四年まで教皇位にある。大教皇、大グレゴリウスと称される。教会の諸改革と共に、アングロ・サクソン族への宣教活動を開始したことでも知られる。

(45) 原文には「翼翼乾乾」とある。『詩経』大雅・大明に「維れ此に文王、小心翼翼、明らかに上帝に事え、聿べて多福を懐う」とあり、『易経』乾卦に「君子は終日乾乾とす」とある。

(46) 原文には「畏天明威」とある。『書経』皐陶謨に「天の明威は我が民の明威に自る」とある。『孟子』梁恵王上篇に「小を以て大に事うる者は、天を畏るる者なり」とあり、『孔子家語』弟子行に「天を畏れて人を敬す」とある。

(47) サンスクリットの「アートマン」の漢訳語。最高の根本原理のこと。

(48) 原文には「首上霊神」とある。

(49) 原文には「心内霊神」とある。

(50) 原文には「首之神」とある。

(51) 原文には「心之神」とある。

(52) 原文には「人能耳順之乎」とある。『論語』為政篇の「六十にして耳順う」を踏まえる。

(53) 『旧約聖書』の「創世記」第1章31節に「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」とある。

(54) 原文には「返帰」とある。

(55) 原文には「化帰上帝」とある。

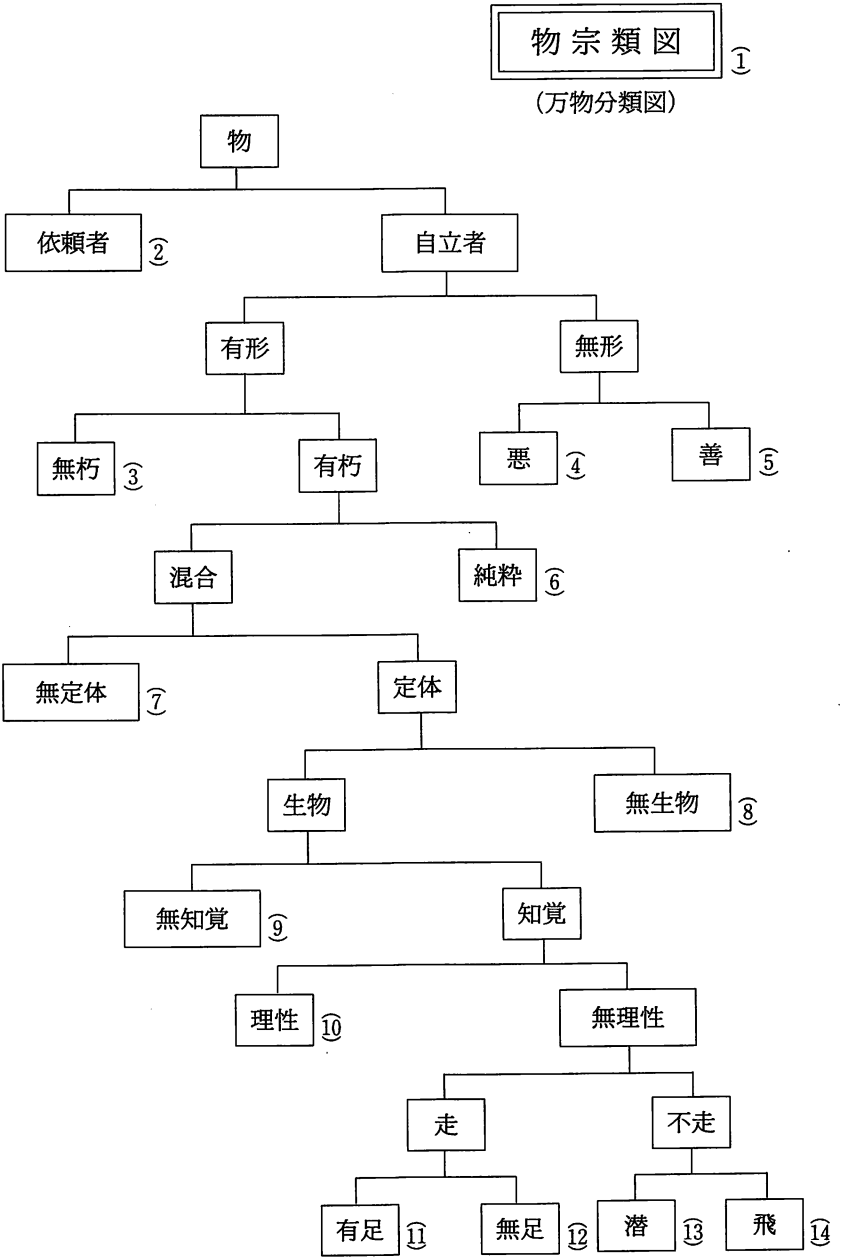
(56) 原文には「物之所以然」とある。首篇の12を参照。

(57) 原文には「作者」とある。首篇の12を参照。

(58) 原文には「公作者」とある。首篇の12に、天主が始動因と目的因という存在原因であり、しかも普遍的で広大なものであることが説かれている。

(59) 「万物一体の思想」は、古くは『荘子』や仏教思想などの中にも見られるが、儒学においては以下の21に引かれるように、程明道が明確に述べた。また、明の王陽明は晩年提唱の致良知説において「良知」は「万物一体の仁」であると強調した。

(60) 原文では「同宗」とある。
(61) 『二程遺書』巻二に見える。程明道（名顥）の言葉である。
(62) 程伊川は「仁は之れを推して人に及ぼすこと、吾が老を老として以て人の老に及ぼすが若し」と述べている（『二程全書』巻三十一・外書二）。なお、朱子は『孟子集註』尽心上篇でこの語を引用するが、「仁は己れを推して人に及ぼす」とある）。
(63) 程子は「己れを以て人に及ぼすは仁なり。己れを推して物に及ぼすは恕なり」と述べている（『二程遺書』巻十二）。
(64) 『大学章句』伝の十章に「上、老を老として民、孝に興る。上、長を長として民、弟に興る」とある。『孟子』梁恵王上篇には「吾が老を老として以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として以て人の幼に及ぼせば、天下は掌に運らすべし」とあり、同尽心上篇には「親を親しむは仁なり。長を敬するは義なり」とある。
(65) 原文には「反哺」とある。養育してくれた者に対して、恩に報いるために食物を与えて養うこと。梁武帝の「孝思賦」に「霊蛇は珠を含みて以て徳に報い、慈烏は反哺して以て親に報ゆ」とある。
(66) 『中庸章句』第二十章に「凡そ天下国家を為むるに九経有り。曰く、身を修むるなり、賢を尊ぶなり、親を親しむなり、大臣を敬するなり、群臣を体するなり、庶民を子とするなり、百工を来たすなり、遠人を柔らぐるなり、諸侯を懐くるなり」とある。鄭玄は「体は猶お接納のごとし」と解釈する。接納とは「交わり受け入れる」ことである。なお、朱子は「体するとは、設くるに身を以て其の地に処りて、其の心を察するを謂うなり」と解釈する。
(67) 『孟子』尽心上篇に「君子の物に於けるや、之を愛するも仁しまず、民に於けるや、之を仁しむも親しまず」とある。
(68) 墨翟は戦国時代の思想家で「兼愛」を説いた。『孟子』においては、「為我」を説いた楊朱と共に「異端」として退けられた（『孟子』滕文公下、尽心上篇）。以後、儒学にあっては概ね排斥された。ここでリッチはこれら儒者の楊墨批判を援用して、万物一体の思想を否定する一つのてだてとしているが、皮肉なことに明末清初においては、しばしば「天主教の説くところは墨子兼愛の説である」という批判がなされている。
(69) 音楽の五つの音色（五音）のこと。
(70) 『論語』述而篇に「子、斉に在りて韶を聞く。三月肉の味を知らず」とある。
(71) 盗跖は大盗賊で、伯夷は殷末の賢人である。武王は周王朝を建立した聖人で、紂王は殷王朝最後の天子で暴君として有名である。
(72) 原文には「本行」とある。
(73) これらのことがらは第五篇のテーマとして取り上げられる。


物宗類図
1
（万物分類図）
物
依頼者
2
自立者
有形
無形
無朽
3
有朽
悪
4
善
5
混合
純粋
6
無定体
7
定体
生物
無生物
8
無知覚
9
知覚
理性
10
無理性
走
不走
有足
11
無足
12
潜
13
飛
14

〔図　注〕

(1)「物宗類図」(本篇8に挿入)は天主によって創造された万物を、その性質によって分類し図示したものである。原図ではさらに細分化したり、具体的な物の名称を挙げているところもあるが、本図では省略し、以下に注記する。なお、原文の「如…」を適宜括弧書き、または「例示」として注記したが、例示の場合と特定の場合とがある。

(2)「物」(万物)は先ず「依頼者」(他のものに依存して存在するもの)と「自立者」(それ自体で存在するもの)に分類される。「依頼者」はさらに「数量」(一・二・寸・丈)「関係」(君・臣・父・子)「性質」(黒・白・涼・熱)「行動」(作る・害う・走る・言う)「受動」(作られる・害われる)「時間」(昼・夜・年・世)「場所」(郷・房・庁・位)「姿勢」(立つ・坐る・伏す・倒れる)「穿つ」(袍裙・田池)に分類される。

(3)「自立者」は「有形」(形体を持つもの)と「無形」(形体を持たないもの)に分類される。「有形」はさらに「無朽」(不滅のもの)と「有朽」(滅びるもの)に分類される。「無朽」は「天・星」が例示される。すなわち、「天」「星座」「土星」「木星」「火星」「太陽」「金星」「水星」「月」である。

(4)「無形」は「悪」と「善」に分類される。「悪」は「悪魔(魔鬼)の属」とされる。

(5)「善」は「天使(天神)の属」とされる。

(6)「有朽」は「純粋」(純)と「混合」(雑)に分類される。「純粋」は「四元素」(火・気・水・土)が例示される。

(7)「混合」は「定体」(成)と「無定体」(不成)に分類される。「無定体」はさらに「火に属するもの」(雷・電)「気に属するもの」(風・霧)「水に属するもの」(雪・露)「土に属するもの」(沙)に分類される。

(8)「定体」は「生物」と「無生物」に分類される。「無生物」はさらに「金属」「流動体」「石」に分類される。「金属」はまたさらに「金」(黄色)「銀」(白色)「銅」(紅色)「鉄」(黒色)「錫」(青色)に分類される。「流動体」は「油・酒・蜜・蠟」が例示される。「石」は「硬石」(鉄・硫・礬・硝)「軟石」に分類される。「硬石」は「粗石」(黒白石)「宝石」(猫目石)に分類される。

(9)「生物」は「知覚のあるもの」と「知覚のないもの」に分類される。「知覚のないもの」は「木」「草」に分類される。「木」は「叢生」「独生」に分類される。「叢生」は「竹」が例示される。「独生」はさらに「有果実」(桃・李)「無果実」に分類される。「無果実」はまた「皮を尚ぶもの」(桂皮)「乳を尚ぶもの」(乳香)「色を尚ぶもの」(蘇木)「堅を尚ぶもの」(鉄栗)「香を尚ぶもの」(檀香)「文を尚ぶもの」(花梨)「花を尚ぶもの」(桂花)「根を尚ぶもの」(甘草)に分類される。「草」は「花のあるもの」(蘭茶)「食べられるもの」「自生するもの」(野草)に分類される。「食べられるもの」は「髄を取るもの」(芥菜)「種子を取るもの」「頭を取るもの」

（芋頭）に分類される。「種子を取るもの」はさらに「豆」（青豆・緑豆・黄豆・紅豆・黒豆）「穀物」（黍・稷・麦・粱・菽）「瓜」（西瓜・冬瓜・南瓜・黄瓜・甜瓜）に分類される。

(10) 「知覚のあるもの」は「理性のあるもの」（論理）と「理性のないもの」（不能論理）に分類される。「理性のあるもの」は人類が例示される。

(11) 「理性のないもの」は「走るもの」と「走らないもの」に分類される。「走るもの」は「足のあるもの」と「足のないもの」に分類される。「足のあるもの」はさらに「家畜」と「山獣」（虎・狼）に分類される。また「家畜」は「芻」（牛・羊）と「豢」（猫・犬）に分類される。

(12) 「足のないもの」は「蛇の類」が例示される。

(13) 「走らないもの」は「潜るもの」と「飛ぶもの」に分類される。「潜るもの」（水中生物）は「鰕」（紅蝦）「甲」「鱗」（龍魚）に分類される。「甲」は「動」（螺・鼈）と「不動」（蠣）に分類される。

(14) 「飛ぶもの」は「羽毛のあるもの」と「羽毛のないもの」（胡蝶）に分類される。「羽毛のあるもの」はさらに「水に浮かぶもの」（鳧・雁）と「水に浮かばないもの」（鴉・雀）に分類される。